
G×T・海鳴の空に羽は舞う

乱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

G×T・海鳴の空に羽は舞う

【Nコード】

N1208W

【作者名】

乱

【あらすじ】

G×シリーズの第三弾。「GS美神」と「とらいあんぐるハート」のクロス小説。「リリなの」じゃない所がミソ。時間的には「とらハ2」と「とらハ3」が混じっています。1はややこしくなるので絡んできません。乱は横×タマ信者なので此処でもタマモが横島に同行します。

TINAMIで連載しています。

第一話「やって来たあの人は優しそうなお兄ちゃんなの」(前書き)

遠い、何処かの世界からあの人はやって来た。

優しそうな笑顔、温かな手の温もり。

何かが起こりそうな予感。

G×T・鳴海の空に羽は舞う、始まるの。

第一話「やって来たあの人は優しそうなお兄ちゃんなの」

其処には神魔の最高指導者の二柱がいた。

『ようこそ、横島さん』

『あんじょうよろしゅーにな』

その二柱を見て横島は複雑な表情をした。

『この世界でもそのキャラなのね…』

神魔人形態の横島はそう呟いた。

『まあ、これがワイらやさかいな』

『貴女の事は向こうの私達に頼まれますから心配しないでください』

『今、どさくさに紛れて女の方の『貴女』って言ったでしょ』

『細かい事は気にせずに』

『細かい事はないわよ!!』

『ともかく、横っちの戸籍はワイらの力で確保してるさかいとりあえずこの住所の所に行ってるんか』

『……分かったわよ』

横島はサっちゃんからメモを受け取り、鞆を手を取った。

『じゃあ、行ってくるわね』

横島は翼をはためかせその場から飛び去った。

『行きましたね…』

『行ったな…』

二柱は飛び去っていく横島を見ながら薄笑いを浮かべた。

『しっかしキーやんも人が悪いな。いくらでも他の場所があったのにワザワザあそこを選ぶやからな』

『貴方だって笑いながらも止めなかったじゃありませんか』

『当然やろ！！こんな面白そうな事、止めるバカがおるか！！』
『そういう事です』

そしてその場には、暫く笑い声が響いていたとか……

反デタントの過激派はデタントの象徴でもある横島を狙っていた。最初は隠れながら、横島が一人の所を狙っていたが、過激派の神魔族はだんだんと手段を選ばなくなってきた。

無関係な人達が巻き込まれるのを恐れた横島は一旦この世界を離れる事にした。

自分が居てもあまり影響のなさそうな世界を最高指導者達に捜してもらい、事態が収拾されるまでそこに隠れていようとしたのだ。

最高指導者はその提案を受け入れ、デタントが既に達成されているこの「とらは世界」を横島に紹介しこの世界の自分達に後を託したのだった。

異空間から抜け出し、現世の空に出た横島はメモを見ながらその場所を捜した。

『え〜と、海鳴市：「さざなみ寮」と……』

第一話「やって来たあの人は優しそうなお兄ちゃんなの」

海沿いの町、海鳴市。地面に降り立った横島は左手にある封印具のブレスレットに【封】の文珠をはめ込み、男の姿に戻った。そして【隠】の文珠の効果解き姿を現す。

「さてと、この地図じゃよく解らないな。とりあえず…」

横島は辺りを見回すと山の中腹の辺りに神社があった。

「あそこに行って街を見渡すか」

そして担ぎ直した鞆が勢いよく背中にぶつかると。

『キャン!』

鞆の中から何やら動物の泣き声が聞こえて来た。

具体的に言えば狐の様な。

「……ちよつと待て…」

横島は鞆を下ろし、中を覗いてみると、

『乱暴にしないでよ！痛いじゃない！！』

そこには狐形態のタマモが居た。

「何をしとるんじゃー、お前は！！」

「ヨコシマのバカーーーッ！！」

タマモは鞆から飛び出し人間形態になると、横島にしがみついた。

「何で私達に黙って居なくなろうとしたのよ！！」

横島はタマモの肩をつかんで離そうとしたが、その肩が小刻みに震えているのに気づき、逆に優しく抱いた。

「アンタが今、あの世界に居場所がないのは分かってるわよ。でもね、あの世界に疎まれてるのは私も同じなのよ。私一人だけ残されて、どうしろって言うのよ…」

「…一人じゃないだろ。おキヌちゃんだっているし、美神さんや…シロだって…」

「ヨコシマがいないじゃない！！ヨコシマがいないけりや……一人と同じよ…」

タマモは泣きじゃくりながらもしがみ付いた手を緩めようとしなかった。

「別にずっと居なくなる訳じゃないんだぞ。反デタントの過激派が居なくなれば直ぐにでも帰るつもりなんだから」

「それでもよ!!」

何があっても引きそうにないタマモに横島は根負けした。

「悪かったよ」

そしてポンポンと軽く頭を叩いて優しく撫でた。

「分かればいいのよ…」

ようやく嗚咽は止まったが代わりにその顔は耳まで真っ赤だった。

その後、何とか落ち着いたタマモは横島に話しかける。

「それでこれからどうするの？」

「とりあえず、あの神社まで行って町を見渡そうと思ってる」

そう言いながら、山にある神社を指さす。

「じゃあ先に行ってるね」

言うや否やタマモは走り去っていった。

「やれやれ」

横島も歩きながら後を追った。

☆

神社へと続く石段に、三人の人影と一匹の子狐がいた。

巫女の格好をした女性の足元に子狐が隠れていてそれを小学生位の女の子が瞳をキラキラさせながら眺めていた。

女の子の傍には少しぶっきら棒だが、それでも優しそうな目で女の子の頭を撫でている男がいた。

女性の名は神崎那美。

女の子の名前は高町なのは。

男の名はなのはの兄、高町恭也。

「少し怖がられてるようだな、なのは」

「初めて会ったもんね。仕方ないかな…」

なのと呼ばれた少女はそれでも諦められないというように子狐を眺めていた。

「ふわ〜♪」

「ごめんね、なのはちゃん。久遠は凄く人見知りなの」

「あ、いいんです。いきなり来ちゃったのは私なんですから」

「すみません神咲さん。いきなりは迷惑だぞと言ったんですがどうしても子狐が見たいと聞かなくて」

「ごめんなさい…」

「謝らなくてもいいのよ。高町さんもあまり気にしないで下さい」

「あの、このサンドイッチ、狐さん…くおんちゃんにあげようと思つて作つて来たんで後で食べさせてあげて下さい」

そう言いなのはは那美にサンドイッチの入ったバッグを渡そうとすると其処に横島がやって来た。

横島は那美を見るなり、ナンパに走ろうとするがその巫女服姿を見たとたんに動きが止まる。

何も言わずに別れて来たおキヌの顔が頭に浮かんだ為だ。

「あ…こ、こんにちは」

「は、はい。こんにちは」

横島は慌てて那美に挨拶をして那美も笑顔で答える。

「こ、こんにちは」

「うん、こんにちは」

なのはも笑顔で横島に挨拶をするが恭也の横島を見る目は鋭かった。

（コイツは一体何者だ？唯者じゃない事だけは確かだが…）

しかし横島は恭也より那美の足元に居る久遠に気を取られていた。

（あの子狐も妖狐か。だが力は封じられている様だな）

（あの人は誰だろ？何か強い霊力を感じるけど）

那美もまた横島の力に気付いていた。すると足元から久遠の気配が消えた。

「久遠？…え、嘘…」

驚いた事に久遠は自分から横島に近づいて行ったのだ。

「くくくん」

横島の足元まで近づいた久遠は横島を見上げて一鳴きした。

「ん？どうした」

横島は久遠を抱きあげると胸の中へと招き入れた。

「……くーん♪」

横島に抱かれた久遠は、そのまま横島にじゃれ付いた。

「…えっと。人見知りなんじゃ…」

恭也は横島を指さしながら那美に聞く。

「そ、その筈なんですけど。…久遠が初めて会った人に自分から近づいて行くななんて…しかもあんなに懐くななんて初めてです」

那美は呆然とその光景を見ている。
そしてなのはは。

「いいな、いいな。私もくおんちゃんと仲良くしたい」

「仲良くすれば？」

「でも怖がって触らせてくれなかったの…」

「そうなんだ」

横島は残念そうに目を伏せるなのはを見ると軽く笑い久遠を抱いたまましゃがんでなのはと顔の高さを同じにする。

「お嬢ちゃんの名前は？」

「あ、なのはです。高町なのは」

「そっか、俺は横島忠夫。よろしくな」

横島は優しく笑いながらなのはの頭を撫でる。

「は、はいっ！よ、よろしくお願いします！！
私私の事はなのはと
呼んで下さい。え、えっと…忠夫お兄ちゃん」

なのはは真っ赤になりながら答えた。

そんななのはを見て恭也は……

（コイツは…敵だ！！）

シスコンパワーを爆発させていた。

「えっと、くおん…久遠^{くおん}か。久遠、なのはちゃんはいいい子だから大丈夫だよ。だから安心しな」

「く〜ん。…こんっ」

久遠は不安そうな顔をしていたがなのはを見て一鳴きする。
そしてなのははゆっくりと久遠の頭へと手を伸ばす。

「大丈夫かな？大丈夫かな？」

優しく久遠の頭に手を載せてゆっくり撫でていく。
久遠もそれを拒む事無く大人しく撫でられている。

「ふわあああ〜〜〜♪」

なのはは久遠の頭を撫でながら幸せ一杯という感じで微笑んでいた。

「くうう〜ん♪」

久遠もなのはの手の暖かさから、なのはの優しさを感じ取っていた。

こうしてこの海鳴の地で横島とタマモの新しい物語は始まろうとしていた。

続く。

第二話「さざなみ寮と翼を持つ少女なの」

「まったく、ヨコシマは何処に行ったのよ」

タマモは神社の境内で横島を待っていたが、何時まで待っても来ないので石段を降りながら愚痴っていた。

其処で彼女は見た、見てしまった……

子狐を抱いて優しく微笑んでいる横島を。

ゾクリッ

とたんに辺り一面を凄まじい限りの殺気が支配した。

「な、何だ！この殺気は！？」

恭也はなのはを庇う様にして敵の襲撃に備える。

「ど、どうしたのお兄ちゃん？」

「動くな、なのは！！」

「きよ、恭也さん……この気配は一体？……はっ、久遠！！ 久遠は？」

那美は怯えながらも久遠を捜すが、久遠は殺気に怯えて横島にしが

みついて震えていた。

横島は、この心当たりがありすぎる殺気に脂汗をだらだら流しながら「は、はは…はははは…」と引きつった笑いを浮かべる事しか出来ないでいた。

「よ、横島さん？」

「おい、どうした？」

「忠夫お兄ちゃん、大丈夫？」

「くくくん」

そして其処に、殺氣の元が現れた。

「ヨ、コ、シ、マ？私を待たせておいて浮気とはいい度胸ね」

「ま、待てタマモ。ワ、ワイはやな…」

横島達の目の前にはニンテールを放射線状に広げ、悪鬼の様な黒いオーラを放ちながら立っているタマモが居た。

（な、何なのこの威圧感は？まるであの時の久遠の様）

（くっ…勝てるのか俺はコイツに？いや、勝たなければ…せめてなのはだけでも。癪だがここはコイツになのはをまかせて…）

「おい、横島とか言ったな。ここは俺が食い止めるからなのは…」

「ヨコシマ、先方を待たせちゃ悪いわ、早く行きましょ」

「あ、ああ……。じゃあ俺達は用事があるからこれで帰るね」

タマモはさっきまでの殺気を嘘の様に消すと笑顔で語りかける。

横島は久遠をなのはに預けるとタマモと一緒に石段を降りていく。

「お、おい」

恭也は横島を呼び止めると真剣な顔つきで聞く。

「逝くのか？」

「多分な……」

横島は虚ろな笑顔でそう答える。

「忠夫お兄ちゃん、またねー！！」
「くくくくく」

それから暫く経った夕暮れ時、ようやく『復活』した横島はタマモと共にさざなみ寮へと向かっていた。

第二話 「さざなみ寮と翼を持つ少女なの」

「酷い目に遭った…」

「自業自得でしょ」

横島とタマモは人に道を尋ねながらやっとさざなみ寮にたどり着いた。

「ようやく着いたか」

「早く入りますよ」

横島達が建物の中に入ろうとすると買い物帰りなのか、大量の荷物を持った男性が話しかけて来た。

「あの、此処に何か御用ですか？」

「あ、はい。このさざなみ寮の方ですか？」

「ええ、僕はこのさざなみ寮の管理人をしている榎原耕介というものです」

（…なんか、こう爽やかで、何と言うかピートタイプのイケメンだな。いかんいかん、これから世話になる人なんだからな。呪うのはやめておこう）

「初めまして、俺は今日からこのさざなみ寮でお世話になる横島忠夫という者です」

「…は？…あの、場所を間違えてませんか？確かに横島忠緒さんという女性の入寮予定はありますけどこのさざなみ寮は女子寮ですよ」

「へ？…でもこの紹介状には確かにここの住所が」

「ちよつと見せてもらえますか？」

横島は言われた通り、耕介にキーやんから預かった紹介状を渡した。

「木川ヤンさんと佐山チャンさんからの紹介ですか、確かに本物の紹介状ですね。しかし、どうでしょう…」

「どうでしょうと言われても…」

「とりあえず中に入れてくれない？こんな所じゃ話し合いも出来ないわ」

横島と耕介が途方に暮れているとタマモがそう提案する。

「そうですね、とにかく紹介状は本物だし詳しい話は中でしたしよ
うか」

二人は耕介に誘われるまま、寮の中に入って行った。

「あら、耕介さん。その方達は？」

「今日入寮予定だった横島さんなんですけど」

「え？でも横島さんは確か女性の筈では」

「ええ、しかし紹介状は本物なのでとりあえず話をしようと思って」

玄関に入るとかなりの美人が出迎えて来て、横島の何時ものナンパ癖が出る所だったがタマモに：

「分かってるわよね、ヨコシマ？」

と、威嚇されたので大人しくしておく事にした。ガクガクブルブルガクガクブルブル

「槇原さん、その人は？」

「ああ、僕の妻でこの寮のオーナーでもある」

「槇原愛と申します。よろしく」

人妻だった事を確認すると、横島は危ない所だったと冷や汗をかきながら安心していた。

「俺は横島忠夫です。よろしく」

「私はタマモよ」

「お茶の用意をしますので中へどうぞ」

そして横島とタマモはリビングルームへと案内された。

其処には入居者だろう何人かが集まっていた。

「あれ、お兄ちゃん。その人達は？」

「知佳ちゃん、今日、入寮予定の人だったんだけど何か行き違いがあったみたいだね。これから詳しい話をしようと思って」

「そうなんだ。初めまして、仁村知佳です」

「私は知佳の姉の真雪だよ」

「あたしは陣内美緒だよ」

「うちは神咲薫です」

（神咲？さっきの娘と同じ名字だな。それにあの美緒って娘はたぶん猫又だな）

自己紹介をして来たので横島達も挨拶をする。

「どうも、横島忠夫です」

「私はタマモよ」

「えーと、タマモちゃんって横島さんの妹なの？」

「違うわよ、どっちかと言うと恋b…むぐっ！！」

「ははははは、い、妹の様な者です。（何を言おうとしとるんじやお前は！！）」

「むぐうううう。 （何よ、いいじゃないケチっ！！）」

「住人はまだ他にもいるんですけど今日は留守にしているんです。もうそろそろ後一人帰って来る頃なんですけど」

「ただいまー」

「あっ、帰って来ましたね」

とたとたと足音が聞こえてくるが。

(ん？確かこの妖気は……)

「ねえ、見慣れない靴があるけどお客さん？…あれ、あなたはさっきの」

扉を開けて入って来た女の子はやはり、さっき神社への石段の所で会ったあの娘だった。

すると、胸に抱いていた久遠が腕の中から飛び出して、

ぽんっ！！

「ただおっ♪」

人型に変化すると横島に飛びついて来た。

「おっと！」

「ああーっ！！こら、なに勝手に抱きついてるのよ、離れなさい！！」

「やーっ！！」

タマモは久遠を横島から引き離そうとするが久遠はしがみ付いて離れようとしなない。

「ちょ、ちょっと久遠ちゃん！いきなり何を！？」

「何で久遠が行き成り変化を？」

「にゃー！！久遠が妖怪だとばれちゃうのだ！！」

「て言うか、美緒ちゃん！！耳、耳、しっぽも出てるよ！！」

皆は久遠がいきなり人前で変化したので慌てまくっている。

「……なあ、おい」

「真雪さん、何落ち着いてるんですか？久遠の事がばれちゃったんですよ？」

「いや、だからな。……アイツ、目の前で狐が人の姿になったのに平然としてるんだが」

「え？……そう言えば……」

そして、横島の方を見ると久遠とタマモに挟まれている横島に那美が話しかけている。

美緒は美緒で耳としっぽを隠そうともせずに横島を見ている。

「あ、あのー。たしか横島さんって言ってましたよね」

「うん、君は神咲……那美ちゃんだったっけ？」

「那美、そん人の事知っとるんか？」

「うん、さっき神社への石段の所で会ったの。それより横島さん、久遠の事変だと思わないんですか？」

「いや、変も何も妖狐が変化するのは別におかしくないだろ」

「えっ！？……久遠が妖狐だって知ってたんですか？」

「まあね。邪悪な気は感じなかったし、那美ちゃんに懐いているようだったから何も言わなかったけど」

「じゃあ、あたしはあたしは？あたしの事も分かったの？」

「ああ、美緒ちゃんだったね。猫又には知り合いもいたし分かっていたよ」

そう言いながら美緒ちゃんの頭を撫でてやると顔を真っ赤にしながらも大人しく撫でられている。

「えへへ／＼／＼」

「また出た。人外キラースキル」

その横では耕介が項垂れていた。

「どうしたんですか、耕介さん？」

「……いえ……俺は美緒に懷いてもらうのに結構苦勞したのに横島君はあんなにあっさり……」

美緒達はそんな彼を無視して横島達に注目している。

「はーなーれーなーさーいー!!」

「やー! やーだー!!」

「ねえ、那美おねえちゃん。久遠は何であんなに横島さんに懷いてるの？」

「私にも分からないの。初めて会った時にも怯えもせずに自分から近づいて行ったし」

「でも那美、あんな……」

「うん。お姉ちゃんも気付いた？横島さん、かなり強い靈力を感じる」

あいからわず久遠とタマモは横島を取り合っているが。

「いい加減にせんかタマモ」

「ううう、でも……」

「いいから、ほれ」

横島はそう言いながら自分の頭の上を指さす。

「はぁ、仕方ないわね」

タマモは溜息を吐きながら呟くと狐の姿になって横島の頭の上に飛び乗る。

「なっ!?!」

それを見て皆は、特に薫と那美は驚愕する。何しろ狐の姿に戻ったタマモは久遠とは違い九本の尾を持っているのだから。

狐になったタマモを見たときとたん薫の目つきは鋭くなり、十六夜を抜くとタマモに切りかかるが、

キンッ

横島は靈波刀で十六夜を受け止め、薫と同じように目つきも鋭くなっていた。

「タマモに何をする!?!」

「な、何……、光る剣?…貴様こそ何故その九尾を庇う?操られているのか!?!」

「九尾だから何だ?」

「何だって……(何やこん人の目、怒ってるような、辛そうな……何て哀しそうな目)」

「タマモが何かしたか?いきなり襲われる様な事を何かしたか?」

「い、いや……しかし九尾と言えば……」

周りの皆はいきなりの事に呆然としているが二人から目は離せないでいた。

「ならこの久遠はどうだ、妖狐だから退治させろと言って来る奴がいたらどうぞと差し出すのか？」

「それは……」

横島の質問にうまく返せない薫だが、そこに真雪が話に入って来た。

「もうそこまでにしときな。薫、あんたの負けだよ」

「はい……」

薫は少し項垂れながら十六夜を鞘に戻し、横島も霊波刀を消した。

「さて、横島だったね。その狐やアンタのその力の事を含めて詳しい話をしてもらうよ」

「え、はい、分かりました」

もうここまで来たら隠しきれないと横島は事情を説明する事にした。もともと、さすがに文珠の事など話せない事もあるが。

「はあ、平行世界……ですか」

「はい、そう言う訳で向こう側の事態が改善されるまでこの世界で暮らす事になった訳です」

「まあ、嘘を付いているようには見えないから信じるのはいいとして住む所はどうするつもりだい。さすがに男を入寮させる訳にはいかないよ」

真雪がそう言うのと槇原達もすまなそうな顔で横島を見る。

「別に問題は無いんじゃない。あっちの姿になればいいだけだし」

「あっちの姿って？」

「やっぱりそれしかないか……」

タマモの言った事に知佳が聞くと横島は溜息を付きながらそう言った。

「まあ、妖狐と猫又は居るし幽霊……いや、刀に憑いている精霊が居てもあんまり問題がない所だから大丈夫だろうけど」

「横島さん、十六夜の事が分かるんですか!？」

「当然よね、ヨコシマは『能力だけは』一流のGSだから」

「言い方がとげとげしいな」

「フンだ!!」

結局、膝の上を久遠に取られたままのタマモは横島の隣でふてくされていた。

「初めまして、私が十六夜です」

十六夜が姿を現すと横島は反応するがタマモの殺気によって飛びかかる事は出来なかった。

「じゃあ、次はヨコシマの番よ」

「そうだな」

横島はあらかじめポケットに入れておいた文珠（【開】の文字込め済）を取り出すとブレスレットにはめ込み神魔人の姿になる。

体は女性体になり、瞳は真紅に染まり、背中には薄緑色の一對の翼が現れる。

先に聞いていたとはいえ目の前で見るとさすがに驚きを隠せない。顔を赤くして見とれていた耕介は愛に尻を抓られていたが……………

「そ、その羽は本物なんですか？」

『うん、本物だよ』

「リアーフィンとは違うんやな」

『リアーフィン？』

HGS＜高機能性遺伝子障害病＞と呼ばれる数十万人に一人という割合で発症する先天疾患。

幼児死亡率が高い為その病気は近年までその存在は確認されて無かった。

HGSの患者は念動や精神感応などの特殊な能力を持ち、その放熱や能力制御を行うのが光の翼、リアーフィンである。

知佳は簡単な説明をするとその背中にリアーフィンを展開する。

知佳のリアーフィンは実体化はしていないが、まるで天使の様な白い翼の形をしていた。

「これがリアーフィン、私もそのHGSの患者なんです」

「知佳……」

『綺麗な翼ね』

「あんなーっ！！」

真雪は横島のその言葉が無神経に聞こえたのか憤るが。

「怒ったって無駄よ。横島は魔族や妖怪だって簡単に受け入れちゃ

うんだから、病気の影響だからって変に思うなんて事はしないわ。
ただ、単純に綺麗だから綺麗っていっただけよ」

「そうなん…ですか？」

『まあね、それを言ったら見た通り私だって普通の人間じゃないし』

横島のその笑顔に知佳も安心したように笑顔を返す。

「でも横島さん、とても綺麗です。きつともてますよ」

『あはは…中身は男だからもとても嬉しくないけどね』

とりあえず横島はこの姿でさざなみ寮で暮らす事になったが、知佳がある疑問を口にする。

「ところで横島さん。翼は隠せるんですか？」

『うん、ちゃんと体の中に隠せるわよ』

そう言う翼は薄い光を放つと吸い込まれるように背中の中に消えて行く。

「で、ヨコシマ。学校はどうするの？」

『え？』

「えって、学校には行くんでしょ？でも此処で暮らすんだったら学校にも女として行かなけりゃ不審に思われるわよ」

横島は思い出したように鞆の中を探るとこっちのキーやんが渡してくれた学校の資料を見る。

するとちゃっかりと転校届けなどの資料には女性として登録されていた。

『……………』

「あ、私と同じ学校。同級生ですね」

「ま、そう言う訳よ。頑張りなさい」

タマモは優しい目をして横島の肩を叩く。

$$\left[\begin{array}{c} \langle \\ | \\ | \end{array} \right]$$

「何だかよく分かんないけどがんばってね」

久遠と美緒もその背中を優しく叩く。

薫や真雪達は乾いた笑いで見守る事しか出来なかった。

横島はおもむろに立ちあがると何処からともなく二つの藁人形を取り出し、五寸釘を打ち込みだす。

『何考えてるのよ、あの最低指導者共は——！！』

さざなみ寮の住人達はいきなりのその行動にただ、啞然とするしかなかった。

その頃、ある異空間では……

『ぎゃああああああー！！』

二柱はいきなり襲って来た苦しみにもだえ苦しんでいた。

『よ、横島さんが怒ってるようですね……』

『やっぱ、悪ふざけが過ぎたか……』

その苦しみはしばらく続いたらしい。

ともあれ、横島とタマモの新しい世界での新しい生活はこうして幕を開けたのであった。

続く。

オマケ

此処は次元を隔てた横島が元居たGS世界。

そのある異空間……

『『ぎゃああああああー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！』』

二柱はいきなり襲って来た苦しみにもだえ苦しんでいた。

『な、何やいきなりー！ー！？』

『こ、これは横島さんの呪いの様です！！』

『向こうのワイらは横っちに一体何をしたんやー！ー！ー！？』

ズズー

『そんな事、考えるまでもなからう』

苦しみ悶える二柱の傍で猿神は呑気にお茶を飲んでいたとさ。

ちゃんちゃん

第三話「まるで天使の様なの」

チュンチュン……

海鳴の地に横島とタマモが来て初めての朝、さざなみ女子寮管理人の槇原耕介は朝早くから住民達の朝食の準備をしていた。

「今日からは二人分多く作らなきゃいけないな」

そう鼻歌を歌いながら料理をしていると誰かが起きて来た。

「…おはようございまふ……」

「ああ、おはよ……ぞふっ!？」

目玉焼きをひっくり返そうと放り上げると目の前に飛び込んで来た光景に目を奪われ、目玉焼きはそのまま耕介の頭の上に落ちる。

起きて来たのは横島、……だが彼、もとい（今は）彼女の姿はランニングシャツにトランクスというラフな格好だった。

横島からしてみれば何時もの眠る時の格好なのだが女性の姿でのソレは色々な意味で凶悪過ぎた。

「どうしたんですか、耕介さん？」

「ど、ど、どうしたって……あ、あの…その…」

横島は寝ぼけていて自分が女性の姿と言う事を忘れている為、実に無防備に耕介に近づいて行く。

当然、身長は耕介の方が上の為彼からは横島を見降ろす形になる。

何と言うか今の横島は『だっちゅーの』状態の為胸の谷間は丸見えであり、其処に視線が釘付けになっている彼を誰が責められるであろう。

「……耕介さん？」

「ひいっ!!??」

「一体朝から何を見ているのかしら？」

「ご、誤解だ、これは誤解だ!!」

……訂正、責める奥さんが居た様だ。

第三話「まるで天使の様になの」（後、出番がないの…）

その後、朝食の時間になり皆が集まった訳だが、体中に包帯を巻いた耕介の事は見ない様にして淡々と食事を進める空気が読める住人達であった。

そして遂に登校の時間になり、それぞれの制服に着替えた皆は寮の前に集まり横島が出て来るのを待っている。

「お待たせ、皆。さあ、いい加減に諦めて出て来なさい」

「わかったわよ」

タマモに連れられた横島は頬を赤らめながら風芽丘学園の女子制服に身を包んで出て来た。

どうやら愛に捕まったらしく、薄く化粧をされ髪型も赤いリボンでツインテールにまとめられている。

「うわ／＼／／／」

「忠夫、綺麗なのだ」

「…自信、無くすなあ／＼」

知佳と美緒は制服姿の横島に見とれて、那美は何やら項垂れていた。何処とは言わないがふくよかな部分を見つめながら……

「ふふふ、女の子なんだからちゃんと綺麗にしくっちゃ」

「だから私は本当は男なんですってば／＼」

「ん？なあ横島。あんた、何か声が変わってないか」

真雪が疑問を口にすると他の皆も気付いたのか「おお、そう言えば」と言っている。

「ああ、これ？さすがにあのままじゃ変に思われるからちよつと裏技を使って声を変えてみたの。変かな？」

「そんな事無いです。とっても綺麗な声ですよ」

そう言って来たのはさざなみ女子寮の住人の一人、岡本みなみ。

横島が来た時はバスケ部の練習試合で留守にしてたが、帰って来てから詳しく説明されて案外すんなりと横島の事を受け入れた。

実際声を変えた方法は勿論【声】の文珠。

タマモは【女】の文珠で女性化した方が手っ取り早いんじゃないかと聞いたが横島曰く、

『文珠での女性化では女の子達の中で暴走しかねん。だが神魔人化すると頭の中は男のままでも精神は幾分女性よりになるので暴走し

てのセクハラなどの心配がいらなんだ』
との事である。さすがに少しは考えている様だ。

「さあ皆、早く行かないと遅刻するわよ」

「はーい、行ってきます」

皆はそれぞれの学校へと走って行き、横島是那美の案内で風芽丘学園へと歩いて行く。

タマモはさすがに入学は無理だったようで久遠と一緒に寮に残り愛の手伝いをするようだ。

そして学園に着いた横島は周りからの視線に晒されていた。

『な、何だあの美女は？』 『二年の神咲と一緒にだぞ』 『転校生なのか？』 『是非、お友達に』 『いや、それ以上の関係に』

「な、何だか動物園の中を歩くパンダの気分…」

「あはは。し、仕方ないですよ、横島さん綺麗ですから」

「ううう、どうせなら元の男の姿でこんなにモテてみたかった」

そう涙ぐみながら彼（彼女）は呟く。

知らない事は幸せなのか不幸なのか、GS世界では地味にモテた事に気付いていない横島であった。

そんな横島の目に見覚えのある男が居た。神社に続く石段でなのとは一緒に居た高町恭也が美少女と仲睦まじげに会話しながら歩いていた。

「あの男は確かなのはちゃんと一緒に居た」

「あ、高町さんですね。なのはちゃんのお兄さんの高町恭也さんですよ。隣に居るのはお付き合いしている月村忍さんですよ」

「……………」

「横島さん？」

「むっむっ」

横島はその光景を怪訝な表情で見つめている。

此处で説明しておくが神魔人状態の横島はその姿に引きずられる様に言葉などが女性仕様になっている。それは言葉だけではなく、思考時の頭の中や表面に現れる表情も同様で、つまり今の横島が恭也を見つめる表情はまるで仲良さげな二人に嫉妬しているかの様なのだ。

ザワザワザワザワ……

『な、何だあの子のあの表情は…』 『ま、まさか高町の奴に…』 『た、高町の奴……M O G Uか？』

「よ、横島さん、何か変な雰囲気」

「ねえ、那美ちゃん」

「は、はいっ」

「私はこんな格好で苦勞してるっていうのにアイツだけ明るい男女交際をしてるっていうのは何か間違ってるよね」

「え、えくと…その…」

「マチガッテルヨネ？」

「はいっ!!ま、間違つて…ますです。はい…」
「うふっ、いい事考えた♪」

そう言つてクスリと笑うと横島はスキップしながら恭也の所へと歩いて行く。

「よ、恭也」

「ん? ああ、赤星か。お早う」

「お早う、赤星君」

恭也に声をかけて来たのは彼の数少ない友人の一人、草間一刀流剣道の遣い手で剣道部の主将・赤星勇吾。

「お早う、月村さん。今日も朝から仲が良いね」

「からかうのなら何処かに行つてくれ」

「何だよ、二人の語らいの時間を邪魔するなつてか」

「そう言う事じゃなくつてだな…」

「きよーおーやっ♪」

「ん?」

「なっ!!」

「え…ええええっ!!」

恭也に近づいた横島は空いていた右腕に笑顔で抱きついた。あまりにも咄嗟の事だったので恭也は反応が遅れ、逆に赤星と忍はその信じられない光景に目を丸くしていた。

「き、君は?」

「えへへへ、今日転校して来たんだよ」

「え、え」と

「あ、職員室に行かなきゃいけないんだった。じゃあ、なのはちゃんにもよろしくね」

そう言うのと横島は駆け足で那美の所へ駆けていく。

ふと、那美と目が合うが彼女は申し訳なさそうな顔で頭を下げると横島と一緒に校舎へと歩いて行く。

「…!! 殺気!!」

殺気を感じた恭也が振り向きざまにその場を離れると赤星が竹刀を振り抜いており、恭也の頬に一筋の切り傷が刻まれていた。

「あ、赤星、何を？」

「恭也、俺は今初めてお前を憎いと思った。月村さんと言う美人の彼女が居ながらまたあんな美人を……。俺は今ならきつとお前を越えられる!!」

そう言いながら涙する彼の後ろには見た事も無い誰かの影が見える様な気がしていた。

誰とは言わないが及川とか樹とかしつとマ○クとか。

赤星と対峙する恭也だがそんな彼を襲う更なる殺気があった。

「恭也…」

「し、忍?……」

「向こうでOHANASIしましょう」

「ちよっ…ちよっと待ってくれ」

「いいからK I N A S A I」

「落ち着いてくれ！！俺はあんな子は知らないんだ、何かの間違いだ！！」

「落ち着くのは恭也よ、少し頭H I Y A S O U K A」

そのまま引きずられて行く恭也を見た男達は先ほどまでの嫉妬心は何処かへと消え去り、敬礼をしてドナドナされて逝く恭也を見送っていた。

「あゝ、スッキリした」

「よ、横島さん。何気に酷いですね」

「何の事かしら？ほほほほ」

こう言う所はさすが美神の弟子と言った所か。

そしてその後、横島は編入先のクラスでの自己紹介だが、女性の姿の為名前は忠夫ではなく忠緒と変えていた。

「転校してきた横島忠緒です。皆さんよろしくお願いします」

『うおおおーーーーーっ！！』

横島の自己紹介にクラスの男子は一斉に雄叫びを上げ、女子は女子で見惚れている様だ。

溜息を付いている横島が目をやると真ん中の席辺りで那美が「あはは」と乾いた笑いを浮かべていた。

「丁度神咲の隣が空いてるな。横島、彼女の隣の席に座りなさい」
「はい」

横島視点

その後は転校生恒例の質問責め。
何処に住んでいるのだの、恋人は居るのかだの、高町との関係はどうかなどと。

住んでいるのは神咲さんと同じさなみ寮、高町との関係はちょっとからかっただけと言ったら男子生徒は安堵の溜息を吐いた。

いや、安心されても困るんだけど。いくら精神が女性寄りと言ってもさすがに男に惚れる様な事は間違っても無いから。

恋人は居ないけど好きな人は居た。…もう死んじゃったけどね、と言ったら好きですだの付き合ってた下さいだのと言って来る者は居なくなつた。那美ちゃんは目を丸くしてたけど。

そしてその日の学校は無事に何事も無く終わった。

那美ちゃんはこの後神社に行くと言うので途中まで一緒に帰ろうと誘い、歩いていると横断歩道の所に目を奪われた。其処に泣いている一人の女の子の自縛霊が居たから。

「那美ちゃん、ちょっと待っててね」
「横島さん？」

那美視点

横島さんが駆けていく先には自縛霊の女の子が居た。この道路は確か三日前に人身事故が起きた場所だった。

今朝通った時には何ともなかったのに、どうやら幽霊になりたての様だ。

私も横島さんが駆け寄らなかつたら気付かないほどの弱々しい霊、私もまだ修行不足かな。

横島さんはしゃがみ込んで女の子の霊に話しかける。

《えくん、えくん》

「こんにちは、お穰ちゃん」

《え？：お姉ちゃん、私が見つかるの？》

「うん、分かるよ。お穰ちゃんのお名前は？」

《私？私の名前は一美っていうの》

「じゃあ、一美ちゃん。ちょっとお話しようか」

《あのね、誰も私の事見てくれないの。いくら話しかけても聞いてくれないし、お母さん達もお花やお菓子を持って来てくれるんだけど泣いてばかりなの。お家に連れて帰ってって頼んでも連れて帰ってくれないし私もここから動けないの。ぐすっ：お、お家に帰りたいよ、えくん、えくん》

横島さんは泣きじゃくる女の子、一美ちゃんを優しく抱きよせながらその頭を撫でてあげている。

「そうね、帰りたいよね。でもね、一美ちゃん。可哀想だけど一美ちゃんはもう死んじゃってるのよ」

《え…？う、嘘だ嘘だ、お姉ちゃんのウソつきーっ！！何でそんなイジワル言うの！！》

一美ちゃんは横島さんから離れようと手で押しながらポカポカと叩く。

それでも横島さんは笑顔を絶やさず彼女の頭を撫で続ける。

「辛いのは分かるわ、信じたくないのも。でもね、それを理解しないと一美ちゃんは天国に行けくなるのよ」

《え？……》

横島さんがそう言うのとポカポカ叩く一美ちゃんの手が止まる。

ふと周りを見ると歩いている人達は横島さんの事を怪訝な表情で見ている、おそらく独り言を言う変な女とも思っているのだろう。

私はそんな横島さんを横目で見ながら薄笑いをしている女の人を睨みつけるとその人は慌てたように去って行く。

そんな間も横島さんは一美ちゃんの説得を続けている。

《でも、でも…》

「うーん、そうだ。那美ちゃん」

「は、はい。何ですか？」

「ちょっと体をお願い」

「体ですか？」

私がそう尋ねると横島さんは一美ちゃんを抱き抱えたまま幽体離脱をして、翼を広げて空へと羽ばたいて行く。

当然周りからは見えないのだが翼を羽ばたかせるその姿はまるで天使の様だった。

横島視点

《お、お姉ちゃん天使さまなの？》

「ううん、違うよ。少し不思議な力があるだけ。さあ一美ちゃん、良く周りを見て」

《うわあ~~~~♪》

一美ちゃんは空の上から見る景色に目を輝かせている。

「ねえ、綺麗でしょ一美ちゃん」

《うん、とっても綺麗》

「あのままあそこに居たらこんな景色は見れないのよ、あの砂浜で遊ぶ事も出来ない。でもね、死んだ事を受け入れて天国に行けば何時かもう一度この世界に生まれて来る事が出来るの。だから成仏しよう、もう一度この世界に生まれて来る為に」

《……》

一美ちゃんは未だ踏ん切りがつかないのか押し黙ったままだ。

ふと下を見ると花を抱えた女性が近づいて来た、おそらくは一美ちゃんのお母さんだろう。

「一美ちゃん、あの人お母さんじゃない？」

《え？あっ、お母さんだ。お母さーん！！》

一美ちゃんは母親に向かって手を振っている。可哀想だけど二人を
会わせてきちんと別れをさせてやらないと。じゃあないと一美ちゃ
んは何時までも成仏できない。

「一美ちゃん、お母さんにお別れの挨拶できる？」

《お別れの？》

「そうよ。そうしたらもう一度お母さんの子供に生まれて来るかも
しれないよ」

《ほんとっ!？》

「約束はできないけど、神様にお願いしたら叶えてくれるかもしれ
ないわ」

《……分かった。お別れする》

一美ちゃんは少し考えた後、ようやくそう言って納得してくれた。

「じゃあ、お母さんにもう一度会わせてあげる。そしてお別れしよ」

《うん…》

那美視点

「あ、あのう。此処で何かあったんですか？」

「え？」

しゃがみ込んだままの横島さんの体を支えていると後ろから声をか

けて来た花束を持った女性が居て、誰かなと思っていると横島さんの体に幽体が戻って来た。

「ふう。あ、一美ちゃんのお母さんですか？」

「そ、そうですけど、何で一美の名前を？」

「まずは本人とお話して下さい」

横島さんはそう言うで一美ちゃんに霊波を送り始めると、うつすらしか見えなかった一美ちゃんがはつきりと見える様になって来た。パサリと音がしたので振り向くと一美ちゃんのお母さんと言う人が花を落として呆然としていた。どうやらこの人にも一美ちゃんが見える様になったようだ。

「一美？一美なの？」

《お母さーんっ！！》

一美ちゃんは泣きながらお母さんに抱きついた、お母さんも駆け寄って来た一美ちゃんを優しく抱きとめる。

「一美い…一美」

《お母さあん。うわああーん》

「ごめんね一美。助けてあげられなくてごめんね」

《もういいの、母さんともう一度会えたからもういいの。う、うええーん》

私はその姿を見て今はもう居ない両親の事を思い出す。久遠との事にもうわだかまりは無い、でもやはりもう一度会えたらと思う。

《お母さん、このお姉ちゃんがねお母さんに会わせてくれたんだよ。そして私、天国に行くの》

「貴女が一美を？一美が天国に行くというのは…」

「はい、本当です。ここで成仏すれば一美ちゃんは天国に行けて、そして再び転生の輪に入る事が出来ます」

《そしたらね、私もう一度生まれて来れるんだって。だから…お母さん、私もう一度お母さんの子供になってもいい？》

「ええ、勿論よ。一美が帰って来るのをお母さん何時までも待ってるわ」

《うん、約束。じゃあお姉ちゃん、私天国に行く》

「なら一美ちゃんにこれをあげる。天国に送ってくれるお守りよ」

そう手渡したのは【転】【生】と刻んだ二つの文殊。

これで後はこの世界のキーやんが気をきかせて上手く一美ちゃんをあつ夫婦の元に転生させてくれるだろう。

そして光に包まれた一美ちゃんはゆっくりと空へと昇りながら光の中に消えていく。

《お母さん、お姉ちゃん、ばいばい》

「一美、待ってるからね。お母さん、待ってるからね」

手を振る一美ちゃんは笑顔で光の粒となり空へと昇って行き、その後ひとしきり泣いた一美ちゃんのお母さんは横島さんに何度もお礼を言って帰って行った。

「横島さん、一美ちゃん早く帰ってこれるといいですね」

「うん。まあ、それにはあの夫婦が今夜あたりから頑張らないとだ
けどね」

その横島さんの言葉でさっきまでの感動がすべて吹き飛んだ。

…最後の最後で台無しです、横島さん！！

そして翌日。

「愛さ〜ん、勘弁して下さい〜い！！」

「だ〜め、大人しくしてなさい。可愛くしてあげるから♪」

「ふえ〜ん」

今日も今日とて横島さんは朝から愛さんに捕まり化粧と髪型のセッ
ティングをされていた。今日は何とお団子頭だ。似合っていて、と
ても可愛いのが少し悔しい。

それにしても、昨日のあの時の横島さんと今のこの横島さん。どっ
ちが本当の横島さんなんだろう？ いや、男とか女とかは別にして。何

故だろ、とても気になる。

「そうだ、ついでにリボンも着けちゃいませよ♪」
「いゝゝやゝゝゝ!」

続く。

同時刻、某所。

「どうしたの、なのは？」
「……出番、無かったの」

第三話「まるで天使の様なの」(後書き)

時間かけた割には横島と那美しか出て来なかったですね、横島も女の姿のままだったし。

まあ、この話では横島はさざなみ寮と学校では女性として過ごさないといけないしと、女性比率が高いです。その分私は楽しいですけれど。

次回は横島と恭也の対決があります、どう言う事になって対決なのか？それは次回の講釈で。

でわっ(。ω。)ノシ

第四話「対決！お兄ちゃんvsお兄ちゃんなの」(前書き)

少々待たせてすみません。

と言うより待ってた人いるのか？

四話目の完成です。

第四話「対決！お兄ちゃんvsお兄ちゃんなの」

「アルバイト？」

「はい。学費や生活費は何とかなるんですけどおこずかいなどはやつぱり自分で稼がないと」

横島は耕介にバイト先の相談をしていた。

生活費などはキーさんとサっちゃんが肩代わりしているが（どうやって人間界の金を得ているのかは不明）自分自身が使うこずかいなどは自分で稼ごうという訳だ。

元来横島はそう言う所は結構真面目だった。

ちなみに今はさざなみ寮の中なので女性の姿である。

「そう言えば翠屋がバイトを募集してたな」

「翠屋？」

「高町さんのお母さんが経営している喫茶店です。ケーキやシュークリームなどの洋菓子が大人気のお店です」

横島の隣に座っていた那美が耕介の代わりに答える。

「お揚げのお菓子は無いの？」

「！！ コンコンッ！！」

「…ある訳ないでしょ」

「ぶっ」

「コン……」

ソファーに横たわり横島の膝にじゃれ付いていたタマモはそう言いながらむくれ、横島の頭に乗っていた久遠も不満そうに項垂れていた。

どうやら厳密な話し合いの結果、膝と頭を交替々（こうたいこうたい）で甘える事にした様だ。

「とにかく、翠屋は男手が少ないらしいから君には丁度いいんじゃないかな。男の姿で働ける訳だし」

「ありがとうございます、耕介さん!!」

横島は滝の様な涙を流しながら耕介の手を握りしめる。
寮内と学校では必然的に女性の姿で過ごさなくてはならないので男として働けるのは願ったり叶ったりの様だ。

「じゃあ、私が案内しますね」

「うん、お願いね那美ちゃん」

そうして那美の案内で横島とオマケに付いて来るタマモと久遠は翠屋へと歩いて行く。

そこで起こる騒動を知る由も無く。

第四話 「対決！お兄ちゃんVSお兄ちゃんなの」

「ここが翠屋です」

「へー、雰囲気の良い店だな」

男の姿に戻った横島は那美の案内で翠屋までやって来た。
タマモと久遠はと言うと：

「油揚げが無いなら別にどうでもいい」

「コン」

拘るなーと、苦笑いを浮かべながらも横島達は店の中に入って行く。

「こんにちはー」

「ちわっス」

「はい。あら、那美ちゃんじゃない。いらっしやい」

「こんにちは、桃子さん」

出迎えて来たのは翠屋のオーナー、高町桃子。

見た目も若く、美人なのだが体から溢れる様な母親オーラにさすがの横島も飛びかかる様な事はしなかった。

那美も恭也となのはには出会ったばかりだが、さざなみ寮の皆とよく食べに来ていて桃子とは顔見知りだった。

「あら那美ちゃん、その人は？…もしかして良い人？」

桃子はニヤニヤしながら那美に聞いて来る。

「ち、違いますよ。横島忠夫さん、最近知り合った人です。バイト

を捜していると言うので案内して来たんです。たしか男手が欲しいと言ってましたよね」

「よろしく頼みます」

「うゝん」

桃子は値踏みをするように横島を見つめる。

「確かに男手は欲しいけど…、横島君だっけ、どんな事が出来る？」

「自分で言うのも何ですけど、手先は結構器用な方だから大抵の事は出来るつもりっス」

「ふゝん。そっちの娘は？」

「私の名前はタマモ、ヨコシマの付き添いよ。まあ、簡単な手伝い位なら出来るけど」

「コン、コーン！」

自分も手伝いがしたいのか久遠はタマモの頭の上で鳴くがそれを見た桃子は申し訳なさそうに語りかける。

「ごめんね。タマモちゃんはいいいけどさすがに動物をお店に出す訳には……」

「こゝゝん……」

そう言われ、久遠は残念そうに項垂れる。

人間形態にはなれるのだが、それは那美達に固く禁じられているので余計に残念そうだった。

そんな久遠の頭を優しく撫でてやると桃子は横島に向き直る。

「じゃあ、試しにこれらのデコレーションを真似して見てくれる？」

桃子は商品棚から取り出したエクレアやケーキを並べてその通りにやって見せてくれと言う。

「了解っス」

横島はそれらを色んな角度から観察してからエクレアやケーキにデコレーションを施して行く。

……それを桃子やアシスタントコックの松尾達は呆然としながら見つめている。

何しろ行き成りやらせたにも拘らず見事なまでの完成度の上、明らかに横島のやった方が美味しそうに見えるのだから。

「お、驚いたわね」

「凄いわ、横島君……」

「じゃあ、OKっスか？」

「そうね、此処まで出来るのなら逆にお問い合わせしたいほどだわ」

そんな時、店の中に一人の女の子が元気そうに駆けこんで来た。

「お母さーん、ただいまー」

「あら、なのは。お帰りなさい」

駆けこんで来たのは学校帰りの高町なのは、桃子の娘である。

「あれ？確かなのはちゃんだっけ」

「ふふふ、こんにちはなのはちゃん」

「あ、那美お姉さんに…、忠夫お兄ちゃんだ」

横島と那美の姿を見たのはは、笑顔で駆け寄って行く、

「く〜くん♪」

「あつ、くーちゃんも居たんだ」

久遠はタマモの頭の上からなのはの腕の中に飛び移り甘えている」

「あら？なのはは横島くんと知り合いなの」

「うん、忠夫お兄ちゃんのおかげでくーちゃんと仲良しになれたんだよ」

実際にあれからなのはは何度も久遠に会いに八束神社に行き、今ではすっかり仲良しなのである。

「そうだったの。じゃあ、横島くんには何かお礼をしなくちゃね」

「お礼…、ですか？」

「ええ、私はお店が忙しいし、兄の恭也と姉の美由希も何かと用事があって中々なのはの相手が出来ないでいたの。この所なのはが嬉しそうにしていたのはこんな可愛いお友達が出来たからなのね」

桃子はそう言うとき久遠の頭を優しく撫でた。

「うん、くーちゃんはとても素敵なお友達だよ♪」
「こーん♪」

「だから横島くんにはとても感謝してるのよ。そうだ、今日お夕飯を御馳走してあげるといいうのはどうかしら？」

「ナイスアイデアだよ、お母さん。なのはもお手伝いするね」

「お願いね、なのは。那美ちゃんと…、タマモちゃんだったわね、貴女達もいらっしやい」

「いいんですか？」

「お揚げ、ある？」

「こん、こーん」

「お前達はまた……」

横島は呆れかえる様に頭を掻くが桃子はそんなタマモと久遠を微笑ましそうに見つめる。

「じゃあ、お稲荷さんにお揚げを使ったお料理をたくさん作りましょうね」

「ほんと？ありがとうございます桃子♪」

「こーん、こーん♪」

横島と那美はそんな二人を窘めようとするが肝心の桃子が何も気にしてない様なのであえて黙っていた。

そして横島達は夕食を高町家で御馳走になると寮に連絡し、桃子も店を早終いして横島達を連れて家へと帰った。

「このおさるーっ!!」

「何だと、このカメがつ!!」

高町家の中庭では二人の少女達が恒例の対決（大ゲンカ）をしていた。

じょうしあきら ふおれんふえい
城島晶と鳳蓮飛、通称レン。

自分を師匠と呼ぶ二人の対決を高町恭也は盆栽の世話をしながら眺めている。

盆栽が並んでいる棚には一つだけ隙間があり、恭也はその隙間を見ると「はあ〜」と重い溜息を吐くのだった。

「…お師匠、また溜息吐いとるで」

「仕方ないだろ、師匠があれだけ楽しみにしていた松の盆栽が買えなくなっただけだから」

楽しみにしていた松の盆栽、それは恭也が金を貯めてようやく買えるかと思ってた矢先に学校で見知らぬ女性に言い寄られた事で恋人の忍の怒りを買って、彼女の趣味である機械関係の部品などを買わされた事で目当てだった盆栽が買えなくなったのだった。

「ただいまーっ!!」

「お、なのちゃん帰って来たで」

「なら勝負は食後に持ち越したな」

そして二人はなのを出迎えに玄関に行くが其処にはなののは他に、桃子と見知らぬ顔があった。

「桃子さん、今日は早いんですね」

「ええ、今日はお客さんを連れて来たから」

「お客って…、その人達？」

晶とレンの目線の先に居るのは横島と那美にタマモ、そして久遠。

「そうだよ、忠夫お兄ちゃんに那美お姉さん、タマモお姉ちゃん、そしてお友達のくーちゃん」

「ども、おじゃましまーす」

「お邪魔します」

「こんばんは」

「こーーん」

挨拶していく横島達だが、其処に恭也もやって来た。

「なのは、お客さんか?……お前は…」

恭也は横島を見ると途端に怪訝な表情になる。
そして傍にはあの殺気を放っていたタマモも居るのだから余計に怪しんでいる。

「何をしに来た？」

「もー、お兄ちゃん。そんな事言っちゃダメだよ」

「そうよ恭也。忠夫君のおかげでなのはにお友達が出来たんだからそのお礼に食事に招待したのよ」

そんな時、恭也を見ていたタマモが口を開いた。

「結構強そうだけどヨコシマ程じゃないわね」

「こらタマモ、余計な事は言うな」

「な、何だと!？」

「お師匠がこんなのほほんとした兄ちゃんより弱い言うんかい!!」

「ええ、そうよ」

そう言われて黙っていられないのか、弟子の二人は攻める様に聞き返すがタマモはあっさりと言い返す。

「そいつは聞き捨てならないな。ならどれだけ強いのか試させてもらおうか」

「恭ちゃん、止めといった方が。ほら、なのはのお客さんだし…」

親指で道場の方を指差し、横島を挑発する恭也を美由希は止めさせようとする。

もつともこれは恭也を心配しての事では無く、なのは客でもある横島に怪我をさせまいとしての事だ。

彼女も横島より恭也の方が強いと信じて疑って無い。

「ほら見ろ、コイツも妙にその気になってるやないか」

横島はそう言いながら勝負を無効にするように仕向けようとするが、恭也が放った言葉が横島の感情に火を付けた。

「ふっ、まあ止めておこう。御神の剣は護る為にある剣術だ。そんな逃げ腰の臆病者の相手をして時間無駄だからな」

ピクッ！

“逃げ腰の臆病者”

そう言われた横島の目に怒りの炎が灯った、だがそれだけならまだ我慢も出来た。確かにあの時まではそうだったのだから。

だが、次の言葉が起爆剤になった。

「そんな事じゃ誰も護る事なんか出来ないだろ」

横島はズカズカと歩き出し、恭也の前に出ると

「何処で闘^やる？」

と、恭也を凍るような視線で射ぬき、恭也もまた、

「面白い。ついて来い、こっちだ」

と、同じような視線で見返す。

「あわわ、お兄ちゃんも忠夫お兄ちゃんもどうしちゃったの？二人とも何だか怖いよ」

場の雰囲気には怯えるのはにタマモも凍りつく様な目で答える。

「あの恭也って奴はヨコシマの決して触れちゃいけない傷に触れちゃったのよ」

那美や美由希達はその目を見て何も言えずにいた。

「じゃあ私は食事の準備をするけど皆はどうする？」

桃子はそんな空気をどこ吹く風と言う様に吹き流し、自分は食事の準備をすると言って来た。

「うちはお師匠の勝負を見たいです」
「俺も」

「じゃあ、私がお手伝いするよ」

「うん、なのはお願いね。貴女達は恭也達の勝負を見学して来なさい」

「す、すみません。御馳走になるのにお手伝いしなけりゃいけない筈なんですけど、横島さんの闘い方に興味があって」

「いいのよ、誘ったのはこっちなんだから。じゃあなのは、行きますよう」

「うん」

台所に向かう二人を見送り、道場に行くと既に恭也と横島は勝負を始めていた。

横島は木刀で、恭也は二本の小太刀の木刀で、其々手加減無しといった感じだった

美由希達は邪魔にならない様に道場の隅に正座して勝負の行方を見守っていた。

そんな中、二人の心境は……

——氣にいらねえ…氣にいらねえ!!

何だコイツは？何なんだ、コイツのこの何もかもを見通すような目は!?

貴様なんかは何が解る、俺がどんな思いで闘ってきたか、何が解るっていうんだ!!

父さんが殺されて、御神の剣を継ぐ為にどれだけの苦難の道を歩いて来たか…

なのにこんな目で俺を見やがって……

叩きのめしてやる!!

——氣にいらねえ…氣にいらねえ!!

何だコイツは？何なんだコイツの闇に囚われた暗い目は!?

あの時の俺と同じ目じゃねえか!!

力のみに囚われた、力だけを求める…力だけを見ている目。

周りから注がれている想いに気付きもしねえ盲目の目。

丁度いい、コイツがあああの時の俺と同じだっていうんなら……

叩き直してやる!!

目標だった父を亡くした恭也、
恋人だったルシオラを亡くした横島、

だが、二人の強さへの求め方には明確な違いがあった。

数十合打ち合った頃恭也は、そして周りの皆も気付き始めた。
受け身だった横島が徐々に恭也を圧倒し始めた事に。

「そろそろ頃合いかしらね」

タマモはそう呟くと道場の壁に掛けてある二本の小太刀の木刀を手
に取ると横島に向けて放り投げる。

「ヨコシマ」

「おう!!」

横島は後ろを振り向く事無く手にしていた木刀をタマモに放り投げ
てから小太刀を受け取り、そしてそのまま恭也に切りかかる。

……御神流剣術で。

御神流で打ちかかって来る横島に対して恭也の怒りはさらに膨れ上がる。

「なっ!?! ば、馬鹿にしゃがって……。舐めるのもいい加減にしゃがれ!!」

「そいつは……。どうかなっ!!」

それが横島の狙いだと気付く事無く。

そしてさらに数合打ち合っていると逆に恭也が横島に打ち負かされ始めていた。

「う、嘘やろ……」

「お、お、お師匠が…押されとる」

晶とレンは信じられないといった表情でそれを見ている。

そしてそれ以上の驚愕の表情をしているのが美由希である。

当然であろう、何年も恭也にしごかれた自分より遥かに完成された御神の剣を今日初めて恭也と打ち合った横島が振るっているのだから。

横島はGS世界において、反デタントを掲げる過激派神魔族と何度も闘っていて、実戦経験や霊的戦闘力なら恭也を上回る。

だが、それ以外の純粋な剣術だけならば恭也の方が横島を遥かに上回り、ましてや御神の剣術のみなら横島が恭也に勝てる筈が無かった。

しかし恭也は初めから横島を舐めてかかり本気を出さずにいて、それ故に恭也は、勝てる機会を自ら棒に振っていたのだった。

そして、自分の剣が上手くないなされた挙句に見よう見まねで身に付けた御神の剣を振るわれた事で怒りに我を忘れ実力を出し切れずにいた。

それに横島は妙神山での修行で小竜姫や猿神との修行を受けている。その小竜姫達の動きに慣れている横島にしてみれば恭也の剣術から見とり稽古で御神の剣術を会得するのはそれほど難しい事では無かった。

「くっ！こうなれば……」

そして恭也は奥の手である神速を発動させ横島に斬りかかる。

「これで終わりだ！！」

タマモ以外の誰の目にも神速で消え去った恭也が勝利を掴み取ると思っていた。

しかし、横島の頭と胴体を打ち抜こうと恭也が放った二本の小太刀は、まるで待ち構えていたかの様に其処に横島が構えていた小太刀に阻まれる。

「「「なっ!?!」」」」

美由希達はそれを信じられないかのように目を見張っていたがタマモはまるで当たり前の様に整然としていた。

「な、何故だ?……」

「いくら速く動いた所で狙った場所に殺気が集中していれば「今から其処に打ち込むぞ」と宣言しているみたいなものだ。後はその場所を防御していればそちらから勝手に撃ち込んでくれるという訳だ」

そして横島は自分の奥の手であった「神速」での一撃を防がれ、呆然としている恭也の首筋に小太刀を宛がう。

絶対の急所である首に攻撃を受けた事でさすがの恭也も負けを認める他は無かった。

「……俺の…、負けだ………」

「何が敗因だったか解る？」

「敗因か……、横島の実力を侮っていた事だろうな」

タマモは項垂れたままの恭也に尋ね、恭也も自分の敗因をそう判断した。

「侮っていたというより見下し過ぎていた所ね。言っとくけど最初から横島の事を認めて真剣に闘っていたら勝っていたのはアンタの方よ」

「そ、そうなのタマモちゃん？」

見下す事無く真剣に闘っていたら恭也が勝っていたと聞き、美由希は驚きながら聞き返す。

「もっとも、純粋な剣術のみでの話だけどね。ヨコシマも剣術はかなり使えるけど剣術だけならコイツの方が圧倒的に実力は上だったわ。だけどヨコシマの事を見下して本気を出さずにいたから勝つどころか逆に剣術を盗まれる事になった訳よ」

「……俺もまだまだ修行不足だった訳だ」

「そう言う事ね。ま、取り返しがつかなくなる前に気付く事が出来て良かったじゃない」

「はははは、まったくだ。（結局、俺は“あの時”から成長してないって事か）」

「そして敗因はもう一つ、ヨコシマを本気で怒らせた事。触れてはいけない傷に触れてね」

「触れてはいけない傷？」

恭也はそう言われ、タマモを見てみるとその悲しみに満ちた瞳から目を離せないでいた。

「臭いから解るわ、アンタは何か大切な物を護れないでいたのね」
「……ああ……」

「でもそれはヨコシマも同じなのよ。ヨコシマも大切な人を護れなかった、私が言えるのは此処まで」

「なっ……」

恭也は愕然として横島に目をやる。

横島もその目を軽く笑いながら見返す。

そして何故此处まで横島に突っかかっていたのかようやく理解した。

“ 同族嫌悪 ”

何処となく同じような心を持っていた、同じような闇を持っていた相手が気にいらなかったただけなのだ。

お互いに……

「じゃあ、勝負が終わった事だしそろそろ食事にしましょうか」

其処に食事の用意を終えた桃子となのはがやって来た。

「す、すみません桃子さん」

「うちらも手伝わないけんかったのに」

「いいのよ、どうせ手伝ってても恭也の事が心配で手につかなかったでしょ」

桃子は笑いながらそう言う。晶とレンの二人は赤くなって俯いた。

「桃子さんは師匠が心配じゃ無かったですか？」

「んんん？別に」

「別について…何で？」

「勝てば勝ったでいいし、負ければ負けたで何か得る物はあったでしょ。殺し合いをしてたわけでもないんだから」

桃子が恭也を見ながらそう言う。恭也も「ああ」と言いながら頷いた。

その表情は何処となく爽やかで晶達はその顔に見惚れていた。

「まあ、それはそれとして。ヨコシマ、これからお世話になるんだしあの事も教えといった方が良いんじゃない？」

「あ、それは私もそう思います。さざなみ寮や学校の事もどうせ隠し切れないんだし」

「んんん、やっぱりそうか。仕方ねーな」

「あの事って何？」

「何と言うか、ややっこしいけど俺にはもう一つ別の本当の姿があるんスよ」

「もう一つの別の本当の姿？…？」

桃子にそう答えると、横島はポケットの中で文珠に『開』と刻んで封印具のブレスレットにはめ込む。

そして横島は神魔人形態へとその姿を変える。

HGSの事がある為、翼は魔力を調整して隠したままにしておき、声も文珠を上手く隠しながら使い変えておく。

そうして横島は自分が別の世界から来た事を話し、霊波刀などを見せて霊能力などがある事、しばらくはこの世界で過ごす事などを説明した。

「と、まあ他にも色々話せない事もあるけど、さざなみ寮に居る時や学校に通う時はこっちの女の姿で過ごす事になるので改めてよろしく」

晶にレン、美由希になのは、そして桃子は女性の姿になった横島を見て啞然としていた。

何しろ、さっきまで男だったのに今は見惚れる様な美少女なのだから。

（余談ではあるが、その時桃子の口元がニヤリと軽く笑いを浮かべたのに気付いたのはタマモだけであった）

恭也はと言うと……………

「は、ははは……ははハハハハ……、き…」
「き、恭ちゃん？」

「貴様だったのかぁー！ー！ー！っ！！！」

おもむろに立ち上がった恭也は横島を睨みつけながら叫び、何時の間にか手にしていた小太刀（真剣）で切りかかつて行く。
当然であろう、忍を怒らせた原因の女が横島であったのだから。

「きゃあぁー！ー！っ！！！」

横島はそれをよけながら道場から逃げ出して中庭へと飛び出し、『封』の文珠で男の姿に戻る。

「行き成り何するんじゃ！！！」

「やかましい！！ 貴様の…貴様のせいで、貴様のせいでえー！ー！ー！っ！！！」

問答無用と言わんばかりに恭也は横島に襲い掛かる。

「俺の盆栽を返せー！ー！ー！っ！！！」

「何のこっちゃい！？！」

二本の小太刀から繰り出される剣撃を横島は先ほどまでとはまるで違うオーバークションで次々にかわして行く。

「よ、は、た、と、何の、こりゃさと、ほい」

「な、何だあれ？」

「何であんな出鱈目な動きでお師匠の攻撃をかわせるんや？」

「忠夫お兄ちゃん、すごーい」

なのはは何故か、横島の方を応援している様だ。

「かわすんじゃねえーっ！っ！ 大人しく切られろ」

「無茶言うな、死んでまうやないか！！」

「殺すと言ってるんだ！！」

「ヤバい、あの目は本気だ。こうなれば……」

横島は霊波刀を出して恭也へと駆け出す。

「蝶の様に舞いーっ！っ！」

「やっとその気になったか」

恭也は駆けて来る横島を迎え撃とうと小太刀を構えるが…

横島は恭也の直前で反転、勢いよく逃げ出す。

「ゴキブリの様に逃げーっ！っ！」

だああああーっ！っ！っ！っ！

恭也を含め、見物していたタマモ以外の全員はそれを見てずっこける。

「ふ、ふざけやがって………#」

湧きあがる怒りを隠そうともしない恭也が立ちあがった瞬間。

「と、見せかけて蜂の様に刺ーす！」

何時の間に回り込んだのか、横島が恭也の後ろ頭を霊波ハリセンで思いつきりはたく。

スパアーーーーンッ

「ぐはあっ」

「そんでもって、ゴキブリの様に逃げーる！」

「き、貴様あーっ！！」

「わはははははっ！正義は勝あーっ！」

「何が正義だ、正々堂々真面目に闘え！！」

「勝てば官軍、負ければ賊軍、所詮負け犬の遠吠えじゃー！」

「そのダメ声、首を切り落として消してやる！！」

そう言って小太刀を振り上げると。

「いやーん、恭也くん怖ーい」

女の姿で瞳を潤ませながら恭也を見上げる横島。

「ぐっ…」

「隙あり！」

すぐさま男に戻り、霊波ハリセンでアップercut。そして、逃亡。

「よ、横島…許さあーーーーん！！」

「ほほほほ、捕まえてごらん♪」

逃げながら女の姿で挑発、もの凄い文珠の無駄使いである。

「き、恭ちゃあゝゝん…」

憧れの兄のあまりにも崩れっぷりの闘いに、涙目の美由希であった。

そしてそれは、恭也の弟子の二人も同様である。

「な、何なんや、あの兄ちゃんは？」

「さっきまでのあの強さは何だったんだよ？」

その疑問に答えるのはタマモ。

「あゝ、何と言うか…。 “アレ” がヨコシマの本来の闘い方なのよ」
「「あれが!？」」

本来の闘い方、そう言われてもアレの何処が闘いなのか？
そう突っ込みたくてたまらない二人であった。

「サイキック猫だまし!!」
「がはあっ! 目があー!」

スパーーンッ

道場裏から閃光が走り、ハリセンの音が鳴り響く。

「ねえ、タマモちゃん」

「何？」

「アレが横島さんの闘い方って言ったよね」

「そうだけど」

「じゃあ、もし恭ちゃんが最初から真面目に闘っていたら」

「当然ヨコシマもあの戦法を使ってたって事ね」

「つまり……」

「どの道アイツは負けてたでしょうね」

「恭ちゃあゝゝゝん」

美由希は不憫な兄に一人涙した。

数日後……

「いらっしやいませー」

翠屋は新しく入ったアルバイト店員目当ての“男性客”で大繁盛していたとさ。

横島の女性形体を見た桃子はアルバイトの条件として女性の姿で接客をするように仕向けたらしい。

「ううう、貴重な男でいられる時間がううう」

そんな涙ぐむ姿を見て、

「ざまあ見やがれ」

そう、ほくそ笑む恭也がいたらしい。

続く。

第四話「対決！お兄ちゃんvsお兄ちゃんな」(後書き)

やっと完成、難産でした。

前半の闘い、横島が本気で怒ればこれくらいの闘いは見せるんじゃないかと私は思っています。

丁稚時代からも潜在能力や才能だけはありませんでしたからね。

そして後半のギャグバージョン、やはりこの闘い方は外せない。
これこそ僕等の横島忠夫!!。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1208w/>

G×T・海鳴の空に羽は舞う

2011年10月20日01時21分発行